

ジオパークをめぐる旅 —— 後醍醐天皇 遠流の島、隠岐の島

和歌山県の高野山が3週連続で放送され、話題となったNHKの人気番組「ブラタモリ」。タモリさんが各地を訪ね、地元の歴史や地理に詳しい専門家に町の成り立ち等を聞く。彼の関心はどちらかといえば、土地の上にある建造物等よりも、地面の傾斜や断層、岩石、川の流れといった地質や地学に類することらしい。

2014年、紀伊半島の南部、白浜から新宮、後に奈良県十津川村の一部を追加し、1市7町2村から成る「南紀熊野ジオパーク」が、「日本ジオパーク」に認定された。今号でも、前・南紀熊野ジオパーク推進協議会運営委員会の飯島委員長がご寄稿で詳しく書かれている。

「ジオパーク（大地の公園）」とは、地質学、地球科学的な価値ある遺産——プレート活動や火山活動等によって形成された地球の仕組みとその上の海陸に広がる生態系、さらにそこで営まれる人々の歴史や文化等を知り、環境保全活動や教育、ツーリズムを推進し、地域経済の持続可能な活性化を目指すものである。

この活動は西欧から始まり、2004年、ユネスコの支援を受けたフランスのNGO「世界ジオパークネットワーク」がジオパークの認定・審査を担ったが、各国で関心が高まり、2015年、ユネスコの正式な事業となった。

日本では、2008年に「日本ジオパーク委員会」が発足、同年、洞爺湖有珠山・糸魚川・島原半島等の7地域が日本ジオパークに認定された（現在、全国で44地域）。さらに、日本ジオパーク委員会の推薦を受け、「世界ジオパーク」への申請を行うことができ、現在、上記の3地域の他に、山陰海岸・室戸・隠岐・阿蘇・アポイ岳・伊豆半島の計9地域が、世界ジオパークに認定されている。

日本、世界いずれの場合も、4年に1回、現地審査等の再認定審査があり、条件付き再認定や認定が取り消されることもある。「南紀熊野」は、今年2019年1月に日本ジオパークとしての再認定をパスし、今後、世界ジオパークを目標としている。

小欄では、2009年に日本ジオパークに、2013年に世界ジオパークに認定された、島根県沖の日本海に浮かぶ小さな島々、隠岐の島（以下、隠岐）について紹介したい。

離島や秘境…という言葉の響きに心惹かれる私であるが、数年前に訪れるまでは、「かつて古えの時代、権力闘争に敗れた後鳥羽天皇や後醍醐天皇、歌人の小野篁らが、遠く都から島流しされた所…」としか知らなかった。寒くて、ひっそりとしているのでは…という予想は全く正反対で、対馬暖流の影響で、造礁珊瑚の北限の生育地でもある隠岐は、気候がよくて、山海の幸に富み、1ターンの若者も居て、町にも活気があった。流罪の罪人とはいえ、「貴人」を食べものに困ったり、生活に支障がある所へは送らないのである。

8世紀の聖武天皇の時代に、隠岐は天皇や公家、役人等の政治犯の遠流（おんる）の地となり、約900年間（江戸時代には一般の罪人も）続いたが、流罪制度は、様々な都の文化ももたらした。

また、隠岐は中国地方唯一の黒曜石の産出地で、旧石器時代から、良質な石器の材料として、広く各地に運ばれていた。江戸時代には天領となり、幕府の直轄地として重要な経済的基盤の一つであった。

隠岐は、島根半島の北40～80kmの日本海に点在する4つの有人島と180余りの細かな無人島から成り、人口は合わせて約2万人である。隠岐の何がすごいのか、やはり、そのドラマチックな「ジオの変遷」であろう。極簡略に言えば、数千万年前、ユーラシア大陸の一部であり、約2000万年前に湖の底となり、1200万年前、日本海ができた。約600万年前の火山活動による隆起でカルデラが形成され、2万年前の氷河期には島根半島と陸続きで、ナウマン象等が行き来していたが、1万年前、温暖化による海水面の上昇で離島となった。

島の至る所に、太古の事象を彷彿させる迫力のある絶景が見られる。高さ257mの大絶壁「摩天崖」や、1kmに渡って垂直にそびえる「赤壁」（赤い色は、マグマのしぶきが酸化したもので、黄や茶色の岩脈も貫入）、観光ポスター等で、夕陽がその先端に重なり、「奇跡のショット」と称される巨大な「ローソク岩」、全長30mの「トカゲ岩」は、

日本三大奇岩の一つである。

生態系でも北方系、南方系、大陸性、亜高山性…と様々な植生が混合し、固有種も多く存在する。「オキサンショウウオ」は、「世界の希少種」と話題になった。

隠岐は、ユーラシア大陸と日本列島の中継地であり、また、大阪から西廻りで瀬戸内海、下関を経て北海道まで交易する「北前船」の風待ちや物資の補給寄港地として栄えた。年間、2000 隻以上の船が寄港したという。(その名残りか、現在も人口の割に、スナックが多いとのこと！) 隠岐は、民謡の宝庫といわれるが、北前船は、ものだけでなく各地の文化や情報を運んだ。

島には 100 余りの神社があり、神楽や古典相撲等、伝統芸能も盛んである(現在、大相撲の八角部屋に、島出身の人気力士「隠岐の海」らがいる)。日本最古の歴史をもつ闘牛「牛突き」は、1221 年の承久の乱で、配流となった後鳥羽天皇を慰めるために行われたのが起源で、多芸多才の歌人としても知られる天皇は崩御されるまでの 19 年間を島で過ごした。後鳥羽天皇を祭神として、隠岐神社が建てられた。

後醍醐天皇は元弘の変で敗れ、1331 年に配流となったが、1 年半後、脱出に成功、足利尊氏らの支援で鎌倉幕府を滅ぼし、南北朝時代の主役となった。この史実を観光に活用し、脱出ルートを島内のタクシーでまわる「後醍醐天皇脱出大作戦」と銘打ったツアーも企画されている。

隠岐は、隠岐松葉蟹や岩牡蠣、サザエ等、海産物の宝庫で、古くは奈良・平城京跡から、「隠岐の干しアワビが献上された」と記した木簡が発掘されている。島根県出身のテニスプレイヤー、錦織圭選手が 2014 年の全米オープンで準優勝した際、インタビューで「何を食べたいか」と尋ねられた。「ノドグロ!」と答えて注目され、その後、地元でもノドグロの価格が高騰して手が届きにくくなった…と住民の方がぼやいていた。

島の玄関、西郷港のすぐ近くに、隠岐世界ジオパークビジターセンターがあり、隣接する隠岐自然館には、樹齢 2000 年の隠岐杉やアジア最古級のワニの化石や魚類・鳥類・昆虫・ナウマン象の牙、「2 億 5000 万年前の片麻岩」や多くの岩石等がダイナミックに展示され、興味は尽きない。

現在、和歌山でも串本町潮岬に、拠点施設として「南紀熊野ジオパークセンター」を建設中で、今夏オープンされる。最近、「ブラタモリ」の取材クルーが串本町を訪れたらしい。タモリさんにも、橋杭岩や一枚岩を見て頂きたい。壮大な地球の歴史を垣間見、ふるさとの大地の成り立ちを知るとは、私たち自身の DNA の来歴、記憶を遡ることでもある。
(谷 奈々)

21 世紀 WAKAYAMA

Wakayama Institute for Social and Economic Development

vol.91

発行 平成 31 年 4 月 15 日
編集発行者 一般財団法人 和歌山社会経済研究所
〒640-8033 和歌山市本町 2 丁目 1 番地
フォルテワジマ 6 階
TEL 073-432-1444 (代)
FAX 073-424-5350
URL : <http://www.wsk.or.jp/>
印刷 白光印刷株式会社

無断転載・複写を禁ずる

裏表紙の写真は、当研究所 OB 萬羽昭夫氏撮影